

中国における西洋音楽受容の歴史 ——北京と東北地方の西洋音楽職人を中心に——

要旨

本論文は、中国における西洋音楽受容の歴史を「西洋音楽職人」の視点から考察したものである。

中国では、1842年の第1次鴉片（阿片）戦争後の外交交渉によって、上海を含む五つの沿海都市が開港されることになったことをきっかけに、西洋音楽の受容が本格的に始まった。当時の中国人の西洋音楽を受け入れる態度は、大きく二つに分けられる。一つは、西洋音楽を積極的に導入しようとする態度である。この態度は、西洋音楽が中国の近代化にとって必要不可欠であるとみなす立場と言い換えることも可能であり、この時期の代表的な人物としては作曲家、教育者であった蕭友梅がよく知られている。彼らの事績は、中国における西洋音楽の受容史にしばしば記述され、先駆者として位置付けられてきた。

もう一つは、西洋音楽や西洋楽器を特別視せず、どちらかといえば与えられたもの、あるいは止むを得ず受容することになった者の態度である。彼らは歴史的な記述の外にあり、蕭友梅らが「名の有る（有名）」存在であるのに対して、いわば「名も無き（無名）」存在であるといえる。

本論では、彼らのような中国人による西洋音楽受容を研究対象とする。彼らは西洋音楽を芸術として捉えたうえで接近したのではなく、楽器を演奏するという行為や、演奏技術から触れることになった。本論では、彼らを「西洋音楽職人」と名付け、とくにフルートを演奏した音楽職人のことを「吹長笛人」と呼ぶ。

本論では、中国における西洋音楽受容の歴史を扱う。とくに北京と東北地方の二つの地域に焦点を絞り、これらの地域における西洋音楽受容の時間的、地域的な差異の比較を通じて、中国における西洋音楽職人そして吹長笛人の誕生および活動について考察する。

本論文は序論、おわりに、を含み、全部で7部から構成されている。

序論では、本論において重要な概念である西洋音楽職人と吹長笛人についての概念整理を行った。

第1章「中国における西洋音楽受容と西洋音楽職人の誕生」においては、中国における西洋音楽の流入から受容に至る歴史を概観する。ここでは、とくに「ミッションスクール」、「西洋式軍楽隊」、「新式学堂」、「学堂楽歌」の四つの事例を取り上げている。

第2章「北京における西洋音楽受容—新文化風潮との関わりのなかで—」では、「ハート楽隊」、「北京大学音楽伝習所」、「国立音楽院幼年班」を取り上げている。北京における西洋音楽受容の最初期の例である英国人ロバート・ハートの私設楽隊に所属した中国人の隊員らに焦点を当て、北京における西洋音楽受容がその後、どのように展開されていったのかを概観している。

つづく第3章「東北地方における西洋音楽受容と教化」は、東北地方における西洋音楽受容の歴史を扱っている。例えば、「宮内府楽隊学员班」と「新京音楽院楽員養成所」をはじめとする、1945年以後に東北地方で次々に誕生した各種の「文芸団体」と「東北音楽専科学校」について述べている。これらは、東北地方の中国人と西洋音楽とを直接結びつけるきっかけとなったものである。また、北京と東北地方との間には、西洋音楽受容にかんして地域的、時間的な差異があることを論じている。

第4章「北京と東北地方における吹長笛人の系譜」では、北京と東北地方における西洋音楽受容のなかで誕生した西洋音楽職人のなかでも、とくに「吹長笛人」の系譜に焦点を当てた。彼らの人物図を描きながら、彼らの事績を述べていた。また、西洋音楽職人と吹長笛人の歴史的な位置付けも行なっている。

第5章「吹長笛人からフルーティストへ」では、20世紀前半の中国における音楽思潮の発展を踏まえたうえで、戦争を終えた1950年代に政府が文芸に対して行なった指導方針について述べている。1950年代以降、国家政策によって西洋音楽職人、吹長笛人に国外で演奏技術を磨く機会が与えられるようになると、彼らの演奏に対する考え方や意識が徐々に変わっていった。政府の方針によって思想の自由が抑えこまれ、芽生えつつあった芸術性の認識がここで途絶えたと結論付けている。

「おわりに」では、西洋音楽職人らが西洋音楽に触れるようになったきっかけは消極的なものであったが、結果として、彼らの活動が西洋音楽受容の歴史において大きな役割を果たしたと結論づけている。また、1950年代まで抑えられてきた西洋音楽に対する芸術性追及の意識が、彼らの次の世代に伝えられていたことを示している。現在の中国では、彼らの教え子らは演奏家として国際的に音楽活動を行っており、中国国内でも新しい西洋音楽の世界を作っている。現在のフルート奏者らの活動や筆者自身の体験を踏まえ、これからの筆者の活動のあり方を再考した。